

ヤシオオオサゾウムシの防除について

1. 背景・目的

ヤシオオオサゾウムシはカナリーヤシ（フェニックス）やピロウなどに寄生する害虫で、幼虫が成長点などを食害することにより、寄生木は枯死してしまいます。

一見正常なヤシでも寄生されていることがあり、寄生の判断は困難です。葉が垂れ下がるなど様相が変化した場合、手遅れであることも多いため、枯死を防ぐためには防除を徹底する必要があります。

当センターでは本種の防除方法を確立するため、スミパイン MC、アトラック液剤の 2 種について、殺虫効果についての調査を実施しました。

なお、スミパイン MC については 2006 年、アトラック液剤については 2008 年に農薬登録されています。

2. 研究の成果

(1) スミパイン MC

スミパイン MC は飛来してきたヤシオオオサゾウムシを殺虫するための薬剤です。この農薬を 50 倍に希釈し、カナリーヤシの頭頂部へ散布し、殺虫試験を実施しました。薬剤散布 5 週後、8 週後、10 週後、12 週後に採取した枝と成虫（7～10 頭）とを飼育容器に入れ、室内にて飼育し、7 日間の死亡状況を観察しました。その結果、死亡率 100%の期間が 10 週以上継続し、12 週後に行った試験でも供試虫数の 85%の死亡が確認されました（表）。このことから残効期間は 2 ヶ月半以上であると考えられます。

(2) アトラック液剤

アトラック液剤は、農薬を樹幹注入し、内部の幼虫を殺虫するための薬剤です。この農薬を樹幹体積 1 m³ に対して 400ml～600ml を注入します。ヤシ内部における農薬の濃度分析と併せた幼虫の殺虫試験では、400ml では 4 ヶ月、600ml では 6 ヶ月効果があると考えられます。一方、成虫に対する殺虫効果は確認できませんでした。

樹幹体積は、樹幹の形状は円柱形と仮定して算出します。ちなみに、樹高 6 m、胸高直径 0.6m のカナリーヤシに、1 m³ 当たり 400ml 注入しようとした場合、本農薬の注入量は 680ml ($(0.6\text{m} / 2)^2 \times \pi \times 6.0\text{m} \times 400\text{ml} / \text{m}^3 = 678.2\text{ml} \approx 680\text{ml}$) になります。

3. 普及のポイント

(1) スミパイン MC

成虫は 3 月から 12 月まで飛翔し、6～7 月と 9～10 月と年 2 回飛翔のピークが確認されています。この農薬を 2 ヶ月に 1 回散布する場合、年 6 回、3 ヶ月に 1 回散布する場合、年 4 回散布することになります。

しかし、カナリーヤシの管理を行っている造園会社では、5 月と 10 月の年 2 回、飛翔のピークに合わせて本農薬を散布することにより、被害を抑えているという事例もあります。

(2) アトラック液剤

被害発生初期の段階で使用するのが良いと思われます。しかし、被害が発生しているのを判断できる場合には手遅れであることが多いため、できる限り様相が健全なうちに使用したほうが良いでしょう。

また、一般的に樹幹注入は対象木にストレスをかけるといわれています。そのため、樹幹注入は最小の程度に止めるべきと考えます。

（森林環境部 白井陽介）



写真1 ヤシオオオサゾウムシ(左:成虫, 右:幼虫)

写真2 成長点の加害状況



写真3 被害木の変化

写真左は2005年8月2日, 写真右は同年10月21日に撮影したもの。右が健全木, 左が寄生木である。

表 スミパイン MC 散布によるヤシオオオサゾウムシ死亡率

散布薬剤	倍率	死亡率 (%)			
		5 週目	8 週目	10 週目	12 週目
スミパイン MC	50	100	100	100	85
無処理区		0	0	0	0



写真4 樹幹注入の様子